

昨冬期の転倒による救急搬送状況と ウインターライフ推進協議会の活動報告

Pedestrian's slip and fall accidents on the icy slippery roads in 2025/26 winter and activities of the Winter Life Promotion Council

三原 夕佳¹, 永田 泰浩¹, 富田 真未¹, 金田 安弘¹, 大宮 哲¹
Yuka Mihara¹, Yasuhiro Nagata¹, Mami Tomita¹, Yasuhiro Kaneda¹, Satoshi Omiya¹
Corresponding author: y-mihara@decnet.or.jp(Y. Mihara)

¹ 北海道開発技術センター

¹ Hokkaido Development Engineering Center

近年、転倒による救急搬送者数は増加傾向にあり、2025 年度冬期には 12 月～3 月で 2,017 人と過去最多を記録した。特に 12 月における救急搬送者数は 868 人と過去最多となり、これまでで最多であった 2014 年 12 月における救急搬送者数 540 人と比較して約 1.6 倍に達している。本稿では、2025 年度冬期における転倒による救急搬送の特徴を整理するとともに、活動 20 年目を迎えたウインターライフ推進協議会の試行的な活動について報告する。

1. はじめに

ウインターライフ推進協議会は、平成 17 年 1 月に「つるつる路面転倒防止委員会」として発足し、その後、数度の名称変更を経て、現在の「ウインターライフ推進協議会」に至っている。札幌市を拠点に、積雪寒冷地における冬を安全・安心・快適に過ごすとともに、冬を楽しむための環境づくりを通じて地域社会へと貢献することを目的としており、民間企業や地域団体、教育機関、行政機関など、多様な主体が参画し、連携を図りながら、様々な活動を継続的に実施している。

ウインターライフ推進協議会の事務局を務める当センターでは、札幌市における雪道での転倒による救急搬送者について継続的な整理・分析を行っている。本稿では、2025 年度冬期の転倒による救急搬送の特徴の整理と気象データを用いた救急搬送者数の要因分析を行うとともに、発足から 20 年を迎えたウインターライフ推進協議会における新たな活動について報告する。

2. 雪道での自己転倒による救急搬送者数の整理

2. 1 分析データ

分析には、札幌市消防局が継続的に収集している冬期における「雪道での自己転倒」に分類された救急搬送データを用いた。データには、救急搬送の発生年月日と時刻、救急車の到着場所、救急搬送者の年齢、性別、けがの程度の情報が含まれている。

2. 2 2025 年度冬期における救急搬送者数

2025 年度冬期の月別救急搬送者数は、12 月が 868 人となり、1 カ月として過去最多を記録した(図 1)。特に 12 月 22 日には 1 日で 86 人が搬送され、日救急搬送者数として過去 2 番目に多い記録となった。さらに、1 月は 472 人、2 月は 599 人が搬送され、いずれも月別では過去 2 番目に多い救急搬送者数となった。このように、12 月以降も救急搬送者数が多かったことが、冬期全体で過去最多となる 2,017 人の記録に繋がったと考えら

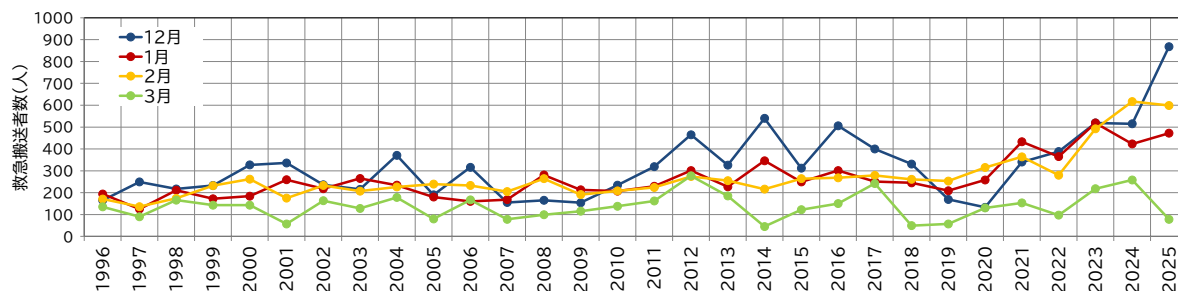


図 1 雪道転倒による月別救急搬送者数の推移 (1996～2025 年度)

れる。

3. 気象データを用いた救急搬送多発日の要因分析

本章では、特に救急搬送者数が多かった12月22日に注目し、気象要因と路面状態の関係から救急搬送者数の分析を行った。

前述のように、12月22日の救急搬送者数は、86人と救急搬送者数の多発日ワースト2位を記録した。12月21日は終日気温がプラスで推移し、氷板の表面がシャーベット状に変化していた(写真1)。その後、22日午前0時には気温が氷点下となり、路面は再凍結したものと考えられる(図2)。救急搬送者数が最も多かった7時から8時の2時間で、札幌市中央区にある札幌アメダスで3cmの降雪が観測されており、氷板上に新雪が積もり、一見すると滑りにくいように見える状況であった(写真2)。



写真1 12/21 17:00
@中央区南14条西6丁目



写真2 12/22 8:30
@中央区北5条西24丁目

各区において同様の降雪状況であったのか、あるいは降雪量の違いによって路面状態に差が生じていたのかを確認するため、区別の救急搬送状況と市内10区の土木センターで観測している区別の日降雪量を整理した。その結果、市内10区のうち、2025年度冬期の救急搬送割合に占める中央区の割合が約26%であるのに対し、22日における全救急搬送者数に占める中央区の割合は約13%と半分程度であった。一方、白石区および清田区では、22日の救急搬送割合が2025年度冬

期の救急搬送割合よりも高くなっていた(図3)。22日の救急搬送割合が高かった白石区および清田区では日降雪量が1~2cmと比較的少なかったのに対し、22日の救急搬送が低かった中央区および西区では4cm以上の日降雪量が観測されていた(図4)。これらのことから、白石区や清田区では、22日午前0時から早朝にかけて形成された凍結路面が十分に雪で覆われず、滑りやすい路面状態が継続していた可能性が考えられる。

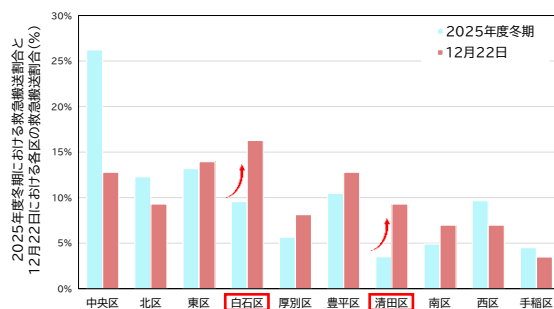


図3 2025年度冬期における救急搬送割合と12月22日における各区の救急搬送割合

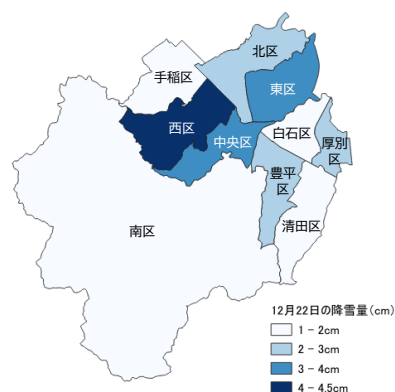


図4 12月22日における日降雪量

4. ウインターライフキャンペーン2026

ウインターライフ推進協議会の発足から20年を迎えた2025年度冬期は、「転倒予防の普及啓発」に加え、「冬を楽しむ」という視点を取り入れたウインターライフキャンペーン2026として、

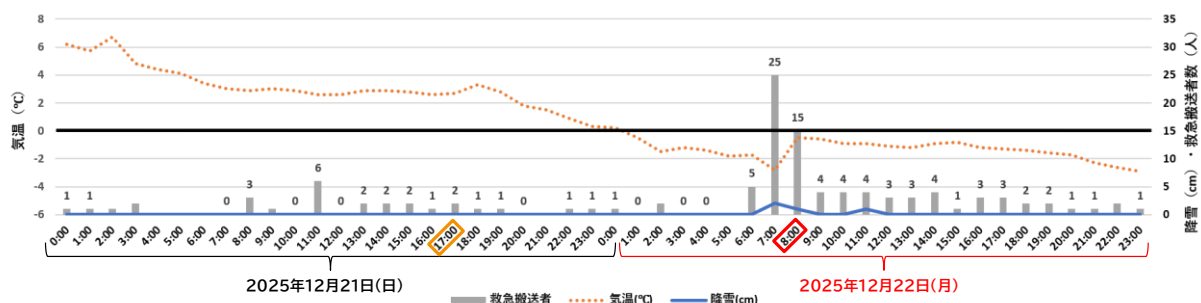


図2 12月21日および22における救急搬送者数・気温・降雪量の推移

試行的な取組を3つ実施した。1つ目は「ウインターライフフォトコンテスト」、2つ目は「雪まつり de 砂まき隊!」、そして「滑らん体験! 雪まつり at J:COM ひろば」である。

「ウインターライフフォトコンテスト」は令和8年2月4日から5月18日にかけて、北海道の冬・雪・寒さを題材とした作品を「冬の絶景部門」、「不思議な現象部門」、「冬の暮らし部門」、「雪あそび部門」、「冬のごちそう部門」の5部門で募集し、総数436点の応募があった(図5)。北海道の冬ならではの魅力が伝わる作品が数多く寄せられたことから、今後は応募作品の有効活用を検討するとともに、フォトコンテストについても次年度以降の継続開催を目指していきたいと考えている。

なお、雪氷学会北海道支部にも協力として参加いただいており、グランプリの作品が本論文集の表紙を飾る予定である。



図5 ウインターライフフォトコンテストのチラシ

「雪まつり de 砂まき隊!」では、雪まつり会場である大通公園2丁目・6丁目・9丁目において、協議会メンバーが転倒防止のための砂を散布し、安全・安心な冬道づくりと砂まき活動のPRを実施した(写真3)。活動中には来場者から感謝の言葉が寄せられたほか、テレビ局から今後の砂散布活動に関する問い合わせもあり、一定の情報発信効果が得られたものと考えられる。一方で、



写真3 砂まきの様子

今回は協議会関係者による活動にとどまったことから、今後は札幌市民も参加できる仕組みづくりを進め、市民一人ひとりの行動変容につながる取組へ発展させていくことが課題であると考えている。

「滑らん体験! 雪まつり at J:COM ひろば」では、来場者に滑り止めアタッチメントを貸出し、利用後にアンケート調査を実施した(表1)。その結果、利用者全員が「効果があった」と回答しており、滑り止めアタッチメントが転倒防止対策として有効であることが示唆された。また、約7割の利用者が今回の旅行中に「雪道で滑って転倒した、または転倒しそうになった」と回答していた。このことから、雪道に不慣れな道外からの観光客が多く訪れる雪まつり会場において、転倒防止を呼びかける取組の重要性が改めて確認された。

表1 「滑らん体験! 雪まつり at J:COM ひろば」の実施概要

項目	概要
実施日時	2026年2月7日(土)・8日(日) 10:00~16:00
アタッチメント利用者	全35名(1日目/11名、2日目/24名)
アンケート回答数	全32名(道内:10票、道外:20票、海外2票)

アタッチメント貸出し中に冬装備の装着チェック調査を簡易的に行った(図6)。滑り止めアタッチメントの装着率は約3%と非常に低く、多くの来場者が滑り止めを装着せずに歩行していた。一方で、帽子的着用率は約4割と比較的高く、布製のキャップの着用も一定数確認された。クッション性は高くないものの、転倒時の頭部や顔面の負傷軽減に一定の効果が期待できる。また、リュックの着用率は約2割、手袋の着用率は約3割であった。居住地は不明であるが、帽子や手袋などの冬装備は想定よりも着用率が高い印象であった。しかしながら、アウターの袖を伸ばして防

寒している人や、ポケットに手を入れて歩いている人も多く見られた。ポケットに手を入れたまま歩行している場合、転倒時にとっさに手をつくことが困難となり、けが重傷化のリスクが高まることが懸念される。そのため、転倒予防に加え、重傷化につながる行動への注意喚起も重要であると考えられる。

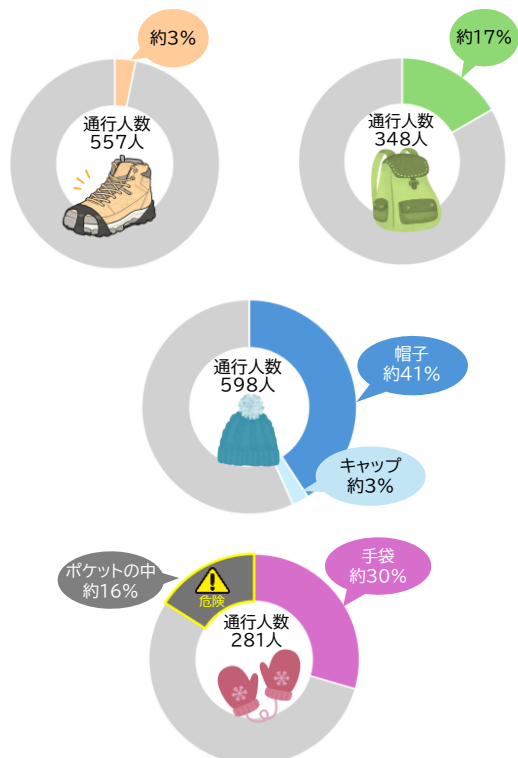


図6 冬装備の装着チェック調査結果

5. まとめ

2025 年度冬期の札幌市における雪道での転倒による救急搬送者数は 2,017 人となり、過去最多を記録した。特に 12 月は救急搬送が集中しており、12 月 22 日の事例分析からは、融解凍結によるつるつる路面の出現が転倒事故の発生に大きく影響するとともに、相応の量の降雪が転倒事故の発生を抑止している可能性が示唆された。また、ウインターライフキャンペーン 2026 で実施した、滑り止めアタッチメントの貸出しでは、その有効性が確認されるとともに、雪道に不慣れな観光客に対する転倒防止啓発の重要性も改めて示された。今後も救急搬送者データの分析を継続するとともに、市民や観光客に向けた効果的な転倒予防の普及啓発を推進し、安全・安心で快適な冬の生活環境の実現に取り組んでいきたい。

謝辞

救急搬送者データをご提供いただいた、札幌市消防局様に深く御礼を申し上げます。

また、ウインターライフフォトコンテストの開催にあたり、多大なるご協力を賜りました日本雪氷学会北海道支部様をはじめ、国土交通省北海道開発局札幌開発建設部様、札幌市様、北海道様に深く感謝申し上げます。